

2026年3月3日

中央大学アカデミック・サポートセンター ライティング・ラボ
2025年度後期活動報告書

抄録

今学期のセッション数は 650 件（前年同期 787 件）、稼働率は 62.00%（前年同期 70.36%）であった（I-3）。前年同期比ではセッション数が137件減少し、稼働率も 8.36 ポイント低下した。形式別では、対面 371 件（前年同期 442 件）、オンライン 279 件（前年同期 345 件）であり、いずれも減少した。

稼働率の低下により、比較的余裕のある期間があった。この期間を活用し、セッションの質向上を目的としたチューター研修を、これまでより時間をかけて実施した。研修では、専門性の高い文章を扱う際にチューターが抱える不安や課題を共有し、学問領域を横断してアカデミック・ライティングの観点からセッションが実施できることを確認した。夏期集合研修および学期中のオンライン研修を通じて一貫したテーマに取り組んだ結果、専門性の高い文章を扱うセッションに対するチューターの不安が軽減され、今後のセッションの質向上が期待される。

稼働率低下の主要因としては、生成系 AI の利用拡大が考えられる。セッションにおいて、生成系 AI で作成した文章をアカデミック・ライティングの観点から修正を行うことで、学生が文章改善のスキルを身につける機会にもなり得る。今後は、生成系 AI の利活用を前提としたセッションの在り方についても検討を行いたい。

利用学生の傾向として、後期は卒論・修論の利用が多いにもかかわらず、締め切り間近に利用する学生や、学部4年次になって初めてラボを利用する学生が多く見られた。締め切り直前の利用では十分なサポートが難しく、学生自身が満足のいくセッションにならないケースがあった。また、提出直前に1~2回のみ利用した学生は文章の検討こそ可能であるものの、学生自身の能力向上にはつながりにくい。継続的な利用こそが論理的思考力や文章作成力の向上に寄与するため、今後もその重要性を丁寧に周知していきたい。

以 上

はじめに

2025 年度後期におけるライティング・ラボの活動状況について、以下の通り報告する。
Ⅰでは開室状況と利用実績、Ⅱではセッション以外の活動、Ⅲでは来期において特筆すべき所見を述べる。

Ⅰ 開室状況と利用実績

Ⅰ-1 開室期間と日数、チューター配置数

開室期間：2025 年 9 月 22 日から 2026 年 1 月 30 日までの月～金曜日

開室時間： 月・木曜日 10:50～17:40

火曜日 14:10～17:40

水曜日 13:20～17:40

金曜日 11:50～15:50

開室日数：77 日（前年同期 74 日）

設置セッション数¹：1071 コマ（前年同期 1137 コマ）

アカデミック・ライティング部門長：尹智鉉

スーパーバイザー（SV）：中野玲子

アシリエイト・スーパーバイザー（ASV）：林雅子

アシスタント・スーパーバイザー（ASV）：松井雄志

シニアチューター（ST）：6 名

チューター：7 名

Ⅰ-2 受付方針（2025 年度後期）

受付優先順位および予約の可否は、文章の種類（対象文章かそれ以外か）に基づく。

1. 対象文章

授業で課題となったレポート、発表レジュメ、卒業論文、修士論文、博士論文、投稿論文、プレゼンテーション原稿（スライド、口頭用）、研究計画書、ボランティアセンター報告書、総合政策学部プロジェクト活動報告書

2. 空きがある場合につき、受け付ける文章

奨学金応募書類に含まれる志望動機書、留学志望書、公務員試験練習課題
日本語翻訳（授業の課題のみ）
そのほか、アカデミック・ライティングの観点でコメントできそうな文章

3. 受付不可とする文章

就職活動関係の文章（キャリアセンターへ案内）、メールや手紙の文章
英語の文章²、公務員試験以外の筆記試験対策のための相談

¹ 稼働可能なブース数すなわちチューターの配置数をコマとしてカウントした。SV/ASV に関しては、セッション空き時間はその他業務を行うため、設置数に含めない。

² 英語論文を書く前段階の日本語による構想などに関する相談は受け付けている。

I-3 実施セッション数と稼働率

実施セッション数：650 件（前年同期 787 件）
 （うち対面 371 件、オンライン 279 件）
 セッション稼働率：62.00%（前年同期 70.36%）³

図 1 に、過去 5 年分のセッション稼働率推移を、表 1 に利用数他の推移を示す。

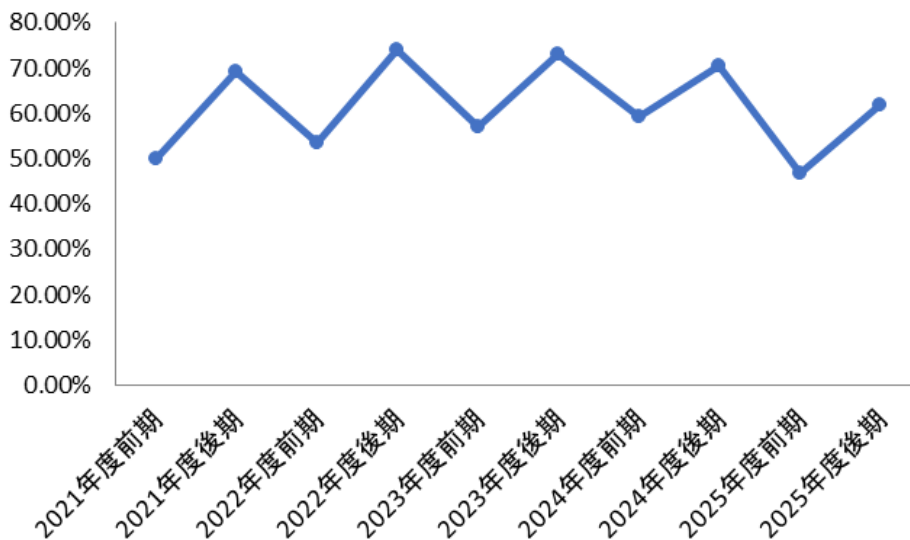


図 1 ライティング・ラボ学期別稼働率の推移

表 1 利用数、設置セッション数、セッション稼働率、利用数前年同期比の推移

年度	前期・後期	利用数	開室日数	設置数	稼働率	利用数前年同期比
2021	前期	425	70	852	49.88%	329.46%
	後期	635	72	916	69.32%	178.87%
2022	前期	408	73	771	53.44%	96%
	後期	698	75	954	74.11%	109.92%
2023	前期	441	75	783	57.09%	108.09%
	後期	772	75	1067	73.10%	110.60%
2024	前期	554	75	950	59.16%	125.62%
	後期	787	74	1137	70.36%	101.94%
2025	前期	375	74	819	46.64%	67.69%
	後期	650	77	7071	62%	82.59%

³ SV/ASV に関しては、セッション空き時間はその他業務を行うため、設置数に含めない。また、No Show（予約はしたものの来室せず）については、実施扱いで稼働率を算出した。実際のセッションは 650 回であるが、稼働率の計算に関しては、セッション数は 664 回としている。

25 年度後期のセッションの稼働実態として、以下に、週毎の設置数・稼働数の推移（図 2）、週毎の稼働率の推移（図 3）週別・曜日別のセッション数と稼働率の表（表 2、表 3）を示す。

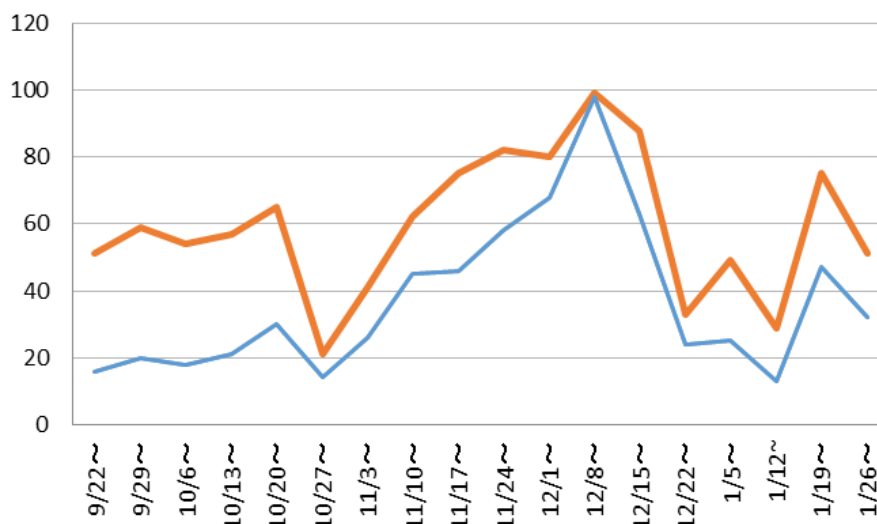


図 2 2025 年度後期週別セッション設置数・稼働数の推移
 （青色：稼働数、茶：設置数）

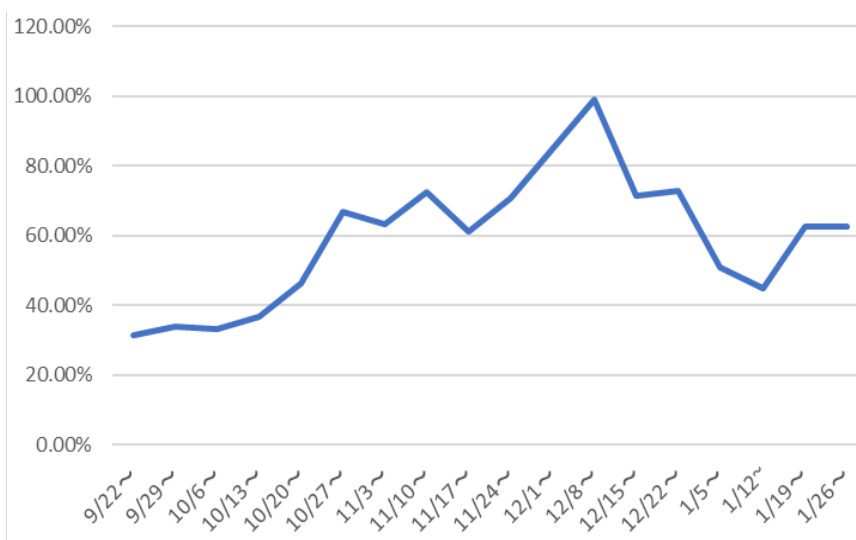


図 3 2025 年度後期週別セッション稼働率の推移

表2 週別・曜日別セッション数・稼働率（9月第4週～11月第4週）

		9/22～	9/29～	10/6～	10/13～	10/20～	10/27～	11/3～	11/10～	11/17～
月	設置数	10	14	12	12	12	13		12	16
	稼働数	3	9	2	3	4	9		8	14
	稼働率	30.00%	64.29%	16.67%	25.00%	33.33%	69.23%		66.67%	87.50%
火	設置数	6	7	8	10	8	8		9	12
	稼働数	4	1	2	6	2	5		7	10
	稼働率	66.67%	14.29%	25.00%	60.00%	25.00%	62.50%		77.78%	83.33%
水	設置数	12	12	7	12	15		13	12	14
	稼働数	2	7	4	4	11		12	12	9
	稼働率	16.67%	58.33%	57.14%	33.33%	73.33%		92.31%	100.00%	64.29%
木	設置数	12	12	13	12	16		16	16	18
	稼働数	3	1	5	5	9		4	8	7
	稼働率	25.00%	8.33%	38.46%	41.67%	56.25%		25.00%	50.00%	38.89%
金	設置数	11	14	14	11	14		12	13	15
	稼働数	4	2	5	3	4		10	10	6
	稼働率	36.36%	14.29%	35.71%	27.27%	28.57%		83.33%	76.92%	40.00%
計	設置数	51	59	54	57	65	21	41	62	75
	稼働数	16	20	18	21	30	14	26	45	46
	稼働率	31.37%	33.90%	33.33%	36.84%	46.15%	66.67%	63.41%	72.58%	61.33%

表3 週別・曜日別セッション数・稼働率（11月第5週～1月第5週）⁴

		11/24～	12/1～	12/8～	12/15～	12/22～	1/5～	1/12～	1/19～	1/26～	前期全体
月	設置数	18	17	21	21	21			18	16	233
	稼働数	13	15	21	21	17			15	11	165
	稼働率	72.22%	88.24%	100.00%	100.00%	80.95%			83.33%	68.75%	70.82%
火	設置数	13	10	16	13	12			15	9	156
	稼働数	12	9	17	12	7			15	6	115
	稼働率	92.31%	90.00%	106.25%	92.31%	58.33%			100.00%	66.67%	73.72%
水	設置数	16	13	15	14		14	12	14	9	204
	稼働数	14	8	15	11		14	4	6	6	139
	稼働率	87.50%	61.54%	100.00%	78.57%		100.00%	33.33%	42.86%	66.67%	68.14%
木	設置数	16	20	21	18		18	17	18	9	252
	稼働数	8	19	21	7		8	9	8	4	126
	稼働率	50.00%	95.00%	100.00%	38.89%		44.44%	52.94%	44.44%	44.44%	50.00%
金	設置数	19	20	26	22		17		10	8	226
	稼働数	11	17	24	12		3		3	5	119
	稼働率	57.89%	85.00%	92.31%	54.55%		17.65%		30.00%	62.50%	52.65%
計	設置数	82	80	99	88	33	49	29	75	51	1071
	稼働数	58	68	98	63	24	25	13	47	32	664
	稼働率	70.73%	85.00%	98.99%	71.59%	72.73%	51.02%	44.83%	62.67%	62.75%	62.00%

【所見】

今学期はセッション設置数を前年同期より 66 コマ増加させたが、実施されたセッション数は前年同期より 137 件減少した。その結果、セッション稼働率は前年同期比で 8.36 ポイント低下した。ただし、稼働率 60% 台はセッションの質を維持するうえで適切な水準と考えられる。今期は比較的空きの多い期間を

⁴ 設置時間内にセッションが終わらず、セッションを延長した場合の場合は、設置数は増やさず、稼働数のみ加算したため、稼働率が 100% を超える場合がある。

活用し、チューター研修を丁寧に行うことが可能であった。今後も、チューター研修の充実を図っていき
たい。

今年度は前期・後期を通じて稼働数および稼働率が低下したが、その主な要因として生成系 AI の利用
拡大が挙げられる。今後は、生成系 AI を用いて作成された文章をセッションで扱う際に可能な支援内容
を整理するとともに、生成系 AI で作成した文章をライティング・ラボで検討することの利点について、
学生への広報を強化していきたい。

I-4 利用学生の内訳

*利用学生数（延べ）⁵ 合計 650 件（前年同期 787 件）

*初来室数 182 名（前年同期 226 名）。

そのうち留学生の初来室は 13 名（前年同期 20 名）

*利用学生の所属と学年を示した表（表 4、表 5、表 6、表 7）以下に示す。なお、表の（）
内は前年度同期の人数を示している。

表 4 利用した学部生の所属と学年

学部全体(所属/学年)	1 年	2 年	3 年	4 年	5 年～	計
法学部	23(20)	7(3)	5(3)	9(10)	0(13)	44(49)
経済学部	8(13)	0(5)	10(6)	26(15)	0(0)	44(39)
商学部	8(5)	2(3)	11(2)	8(38)	0(0)	29(48)
理工学部	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
文学部	8(76)	25(8)	20(28)	273(247)	26(7)	352(366)
総合政策学部	2(17)	8(9)	9(7)	8(17)	2(2)	29(52)
国際経営学部	0(0)	3(0)	0(2)	12(10)	1(1)	16(13)
国際情報学部	1(5)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	1(5)
法学部通信教育課程						2(2)
聴講生						0(0)
科目等履修生						0(0)
計	50(136)	45(28)	55(48)	336(337)	29(23)	517(574)

表 5 利用した学部留学生の所属と学年

学部留学生(所属/学年)	1 年	2 年	3 年	4 年	5 年～	計
法学部	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
経済学部	4(4)	0(0)	0(0)	1(4)	0(0)	5(8)
商学部	5(0)	0(0)	0(0)	0(9)	0(0)	5(9)
理工学部	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
文学部	0(1)	0(3)	0(0)	6(6)	0(0)	6(10)
総合政策学部	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
国際経営学部	0(0)	0(0)	0(1)	3(3)	0(1)	3(5)

⁵ 延べ利用数。実施セッション数に基づくため、たとえば同一学生の同一日利用および 2 連続セッション
は、2 セッションとしてカウントしている。

国際情報学部	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
法学部通信教育課程	0(0)					
聴講生	0(0)					
科目等履修生	0(0)					
計	9(5)	0(3)	0(1)	10(22)	0(1)	19(32)

表6 利用した大学院生の所属と課程

大学院全体(所属/課程)	前期	後期	計
法学研究科	72(46)	15(1)	87(47)
経済学研究科	8(20)	3(7)	11(27)
商学研究科	14(23)	0(0)	14(23)
理工学研究科	0(0)	2(0)	2(0)
文学研究科	19(79)	0(6)	19(85)
総合政策/公共政策研究科	0(31)	0(0)	0(31)
ビジネススクール	0(0)		0(0)
計	113(199)	20(14)	133(213)

表7 利用した大学院留学生の所属と課程

大学院留学生(所属/課程)	前期	後期	計
法学研究科	62(43)	11(1)	73(44)
経済学研究科	8(20)	0(0)	8(20)
商学研究科	14(21)	0(0)	14(21)
理工学研究科	0(0)	0(0)	0(0)
文学研究科	13(70)	0(6)	13(76)
総合政策/公共政策研究科	0(30)	0(0)	0(30)
ビジネススクール	0(0)	0(0)	0(0)
計	97(184)	11(7)	108(191)

最後に、セッションで検討した文章の種類を表8に示す。

表8 相談文章の種類

相談文章の種類	全体(前年同期)	留学生(前年同期)
授業のレポート	146(225)	25(28)
授業の発表資料	21(11)	14(7)
研究計画書	22(37)	2(16)
卒業論文	334(313)	9(10)
修士論文	76(154)	68(143)
博士論文	3(3)	0(3)
投稿論文・研究ノート	11(20)	9(6)
学外での発表資料	2(4)	0(1)
その他	35(30)	0(9)
計	650(787)	127(223)

【所見】

文学部1年生の利用が大きく減少した。これは留学生ではなく、日本人学生の利用減少によるものである。一方で、文学部の卒業論文に関する利用は増加しており、こちらは日本人学生の利用増加が要因であった。文章作成力や論理的思考力は、学部での早い段階からライティング・ラボを継続的に利用することで身につくため、その重要性を学生にわかりやすく伝え、早期利用を促す広報を強化していきたい。

修士論文の利用については、日本人学生の利用に大きな変化は見られなかったものの、留学生の利用が大幅に減少した。特に減少が顕著であったのは文学研究科前期課程である。一方、法学研究科では前期課程・後期課程ともに利用が増加した。前期課程に在籍する留学生に対し、ライティング・ラボを利用する利点をどのように伝えていくか、今後検討が必要である。

I-5 夏期開室

今年度も夏季休業期間に開室を行った。セッションはSV、ASV、及びチューターが行い、2~4名で行った。なお、SV/ASVに関しては、セッション空き時間はその他業務を行うため、設置数に含めない。

- ・開室日程 7/29、7/30、7/31、8/1、8/19、8/21、8/26、8/28、9/2、9/4 (計10日間)
- ・開室時間 13:20~17:40
- ・設置セッション数 : 92コマ⁶
- ・初来室数 18名 (留学生1名)
- ・実施セッション数: 56件 (うち対面22件、オンライン34件)
- ・セッション稼働率: 61.96%⁷

セッション数と稼働率を表9に示す。また、利用学生の所属と学年を示した表(表10)を以下に示す。留学生および大学院生の利用は少ないため、利用のあった所属のみ示す。

表9 セッション数・稼働率

		7/29~	8/19~	8/26~	9/2~	全体
火	設置数	15	4	4	7	30
	稼働数	12	2	0	5	19
	稼働率	80.00%	50.00%	0.00%	71.43%	63.33%
水	設置数	12				12
	稼働数	6				6
	稼働率	50.00%				50.00%
木	設置数	17	6	8	8	39
	稼働数	11	6	4	6	27
	稼働率	64.71%	100.00%	50.00%	75.00%	69.23%
金	設置数	11				11
	稼働数	5				5
	稼働率	45.45%				45.45%
計	設置数	55	10	12	15	92
	稼働数	34	8	4	11	57
	稼働率	61.82%	80.00%	33.33%	73.33%	61.96%

⁶ 閉室の時間を過ぎて延長した場合、もともと設置していたわけではないため設置数は加算せず稼働数のみ加算する。表9の黄色で示した箇所である。

⁷ SV/ASVに関しては設置数に含めない。また、No Show (予約はしたものの来室せず)については、実施扱いで稼働率を算出した。実際のセッションは56回であるが、稼働率の計算に関しては、セッション数は57回としている。

表 10 利用した学部生の所属と課程

学部全体(所属/学年)	1年	2年	3年	4年	5年～	計
法学部	1	1	0	4	0	6
経済学部	0	0	0	1	0	1
商学部	0	2	0	3	0	5
理工学部	0	0	0	0	0	0
文学部	4	1	8	4	0	17
総合政策学部	1	5	2	0	0	8
国際経営学部	0	1	1	2	0	4
国際情報学部	0	0	0	0	0	0
法学部通信教育課程						0
聴講生						0
科目等履修生						0
計	6	10	11	14	0	41

学部留学生の利用は国際経営学部2年生・・・1人
法学研究科博士後期課程・・・13人(すべて留学生)
商学研究科博士前期課程・・・2人(すべて留学生)

・相談文章の種類 ()内は留学生の人数

授業のレポート 30件(3件)
研究計画書 4件(0件)
卒業論文 9件(0件)
投稿論文・研究ノート 13件(13件)

・ライティング・ラボを知ったきっかけ ()内は留学生の人数

ラボのHP/SNS 1件(0件)
授業で知った/先生にすすめられた 16件(0件)
レポートの書き方資料で知った 2件(1件)
学内のポスターやパンフレットで知った 2件(0件)

【所見】

夏季休業期間の開室では、今年度も7月末の利用が特に多かった。これは、期末の授業レポート等の締め切りに伴い、駆け込みでの利用が増加したことが主な要因である。また、試験期間終了後にレポート執筆に取りかかる学生も多いため、7月末は需要が集中しやすい時期である。来期も、この期間に対応できるよう、セッション設置数の増加を検討したい。

8月および9月の主な利用目的は、卒業論文や研究計画書であった。夏季休業中の稼働率は61.96%であり、この期間にも一定のニーズが存在することが明らかである。

I-6 冬期開室

冬季休業期間に行った開室について以下に記す。セッションはSV、ASV、チューターの3名で行った。セッションは全てオンラインで行った。

セッション設置数が少ないため、ここでは稼働率ではなく、稼働数や利用者の内訳を報

告する。

- ・開室日程 12/24、12/25、12/26（計3日間）
- ・開室時間 13:20～16:40
- ・利用学生数（延べ） 合計11名（留学生9名）
- ・初来室数 3名（留学生2名）

利用数が少ないため、利用があった所属と学年のみ示す。学部留学生の利用はなかった。

文学部3年生・・・1人

法学研究科博士前期課程・・・・・・1人

商学研究科博士前期課程・・・・・・8人(すべて留学生)

文学研究科博士前期課程・・・・・・1人

- ・相談文章の種類（）内は留学生の人数

授業のレポート 1件(0件)

修士論文 10件(9件)

- ・ライティング・ラボを知ったきっかけ（）内は留学生の人数

ラボのHP/SNS 1件(1件)

授業で知った／先生にすすめられた 2件(2件)

ラボのイベント（講座など）で知った 1件(0件)

入学時のガイダンス／資料で知った 1件(1件)

【所見】

冬季休業期間の開室では、主な相談内容は修士論文であった。この時期は修士論文の提出直前にあたるため、特に博士前期課程に在籍する留学生の利用ニーズが高い。こうした状況を踏まえ、来年度も冬季開室を継続して実施したい。

一方で、締め切り直前の駆け込み利用が多いことから、早い段階でライティング・ラボを活用するよう促す広報も引き続き行っていく必要がある。

I-7 利用学生のアンケート

各セッション終了後、利用学生に任意でアンケートに協力してもらった。対面では紙面にて、オンラインはGoogleフォームにて実施した。今期は対面では290通、オンラインでは60通を回収した。質問項目と結果を以下に示していく。

ライティング・ラボを知ったきっかけ

回答の重複を避けるため、ライティング・ラボを知ったきっかけについては、予約フォームにて初回利用の学生に限定してたずねた。回答件数と割合を表11にまとめた。

表 11 ライティング・ラボを知ったきっかけ(複数回答可)

きっかけ	全体の件数(%)	うち留学生の件数(%)
ラボのHP/SNS	13 (6.3)	1 (7.1)
授業で知った/先生にすすめられた	114 (55.1)	6 (42.9)
友人/先輩/後輩にすすめられた	27 (13.1)	2 (14.3)
レポートの書き方資料で知った	13 (6.3)	1 (7.1)
学内のポスターやパンフレットで知った	22 (10.6)	1 (7.1)
ラボのイベント(講座など)で知った	3 (1.4)	0 (0.0)
入学時のガイダンス/資料で知った	5 (2.4)	1 (7.1)
その他	10 (4.8)	2 (14.3)
計	207 (100.0)	14 (100.0)

【所見】

来室のきっかけは例年通り、教員の推奨によるものが最も多かった。今後も学生だけでなく教員への宣伝を継続し、学生への周知につなげていきたい。また、今回はその他を選択した学生が多く、回答として「TemiCoで知った」「附属高出身で知っていた」「文学部事務室の方が教えてくださいました」といったものであった。TemiCoは法学部生向けの情報サイトである。茗荷谷キャンパスへ移転後、法学部の学生にもラボを認知できるよう、TemiCoに告知を出した効果があったと言える。また、これまで中央大学杉並高校にチューターを派遣していたことがラボの利用につながったことも示された。教員への宣伝だけでなく、こうした様々な広報や活動を継続し、間口を広げていきたい。

一方で、後述のようにチューターに専門的なアドバイスを求めるなど、ラボを利用する意義までは学生に浸透できていない面がある。ライティング・ラボとはどのような場所なのか、なんのために利用するのかまで学生に認知されるように、今後も多様な広報活動に力を注いでいく。

セッションは有益だったか⁸

ここからはセッション後のアンケートの回答をまとめていく。比較として、表には2025年度前期の回答も併記した。まず、セッションが有益だったかどうかに対する回答人数と

⁸ 「有益ではなかった」「あまり有益ではなかった」「どちらともいえない」「有益だった」「とても有益だった」の5段階評価。

割合を、セッション形式別に表 12 にまとめた。

表 12 セッションは有益であったか

回答項目	後期の回答人数(%)		前期の回答人数(%)	
	対面	オンライン	対面	オンライン
有益ではなかった	1 (0.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
あまり有益ではなかった	1 (0.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (3.7)
どちらともいえない	3 (1.0)	1 (1.7)	1 (0.6)	0 (0.0)
有益であった	39 (13.5)	10 (16.7)	31 (17.4)	13 (24.1)
とても有益であった	245 (84.8)	49 (81.7)	146 (82.0)	39 (72.2)
計	289 (100.0)	60 (100.0)	178 (100.0)	54 (100.0)

※後期対面セッション 1 件回答なし

【所見】

「セッションは有益であったか」の問いに対して、前期同様ほとんどの学生が対面・オンラインセッションともに「有益であった」「とても有益であった」と回答していた。とくにオンラインセッションは、前期では「あまり有益ではなかった」という回答が 2 件あったが、後期では「有益ではなかった」「あまり有益ではなかった」という回答はいずれも 0 件であり、対面セッションと同等の満足度を多くの学生が得られたと言えるだろう。オンラインセッションで有益であったと回答した理由として、「今後の方向性や目的の明確化」、「文章に対する不安の解消とポジティブフィードバックによる自信」に類するものがよく回答されていた。オンラインセッションはお互いにカメラをオフにした状態でセッションを行っているが、その中でもチューターが丁寧に学生に対応し、執筆への不安を和らげたことで、満足度が上がったのではないだろうか。

一方、対面セッションでは「有益ではなかった」が 1 件、「あまり有益ではなかった」が 1 件、「どちらともいえない」が 3 件見られた。「有益ではなかった」という回答について、締め切り日当日のセッションであった。加えて、予約時とセッション時で検討希望箇所に食い違いが見られていた。「どちらともいえない」という 3 件の回答も、いずれも締め切り間際のセッションであった。「どちらともいえない」の理由として、「ファイルを先におくったのに読んでいただけただけではなかった」とあった。また、1 件は来室のきっかけが教員の推奨であった。これらのことから、ネガティブな回答の背景として、締め切り直前で学生の時間的・心理的余裕のない状態であったと考えられる。

セッションを有益だと感じた理由として、「他者と改めて自分の文章を振り返ることが出来て、新たな気づきがあった」「人に話してみると、自分の分からないことを自覚できた」「自分では気付けないミス等に気付けたから」といった回答が挙がっていた。これこそセッションの意義であるが、締め切りまでに書き上げられるか不安な学生にとっては、なぜチューターが書いてあることを自分にわざわざ質問してくるのか、意図を掴めずにいたのではないか。効果的なセッションが行えるよう、チューターは質問の意図

を明確にしたり、提出までに最低限どこを修正すれば良いのか示したりすることで、学生に安心感を持たせる工夫が必要である。

ラボを知ったきっかけとして、教員からの推奨が多い。その他の回答として TemiCo での宣伝や事務室からの紹介、元々附属高出身であるなど、様々な方面でラボを知る機会が増加したと言える。ただし、ラボ自体は知っていても、具体的に何をするとところなのか、ラボを利用する意義は何かまでは理解できていない学生も増えたと考えられる。とくに、教員等周りからの紹介の場合、自分で良い文章を書き上げようというモチベーション自体がそれほど高くない場合もある。ラボの存在を周知させるだけでなく、ラボは主体的な書き手を育てる場であること、早めの来室を呼び掛けることに、今後さらに力を入れていきたい。

なお、「あまり有益ではなかった」という回答について、なぜそう感じたのかの理由や、後述の「対面セッションの良かった点／困った点」にも一切回答がなかった。このことから、受動的にラボを利用する学生と、学生の主体性を求めるラボとのギャップがあることが推測される。

セッションの時間⁹

次に、セッションの時間についてどう感じたかについての回答人数と割合を表 13 に示した。

表 13 セッションの時間についてどう感じたか

回答項目	後期の回答人数(%)		前期の回答人数(%)	
	対面	オンライン	対面	オンライン
短かった	17 (5.9)	2 (3.3)	5 (2.8)	0 (0.0)
少し短かった	54 (18.8)	13 (21.7)	21 (11.8)	14 (25.9)
妥当だった、ちょうどよかった	214 (74.3)	44 (73.3)	151 (84.8)	38 (70.4)
少し長かった	2 (0.7)	1 (1.7)	1 (0.6)	1 (1.9)
長かった	1 (0.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (1.9)
計	288 (100.0)	60 (100.0)	178 (100.0)	54 (100.0)

※後期対面セッション 2 件回答なし

【所見】

対面・オンラインセッションともに 70%以上の学生がセッション時間は妥当だと回答していた。ただ、前期と比べると、対面セッションは「妥当だった、ちょうどよかった」との回答は減少傾向にある。後期は卒業論文や修士論文など長い文章を検討することが多かった。一度のセッションで文章すべてを検討できるわけではないため、学生の不安や疑問点がすぐに解消されず、物足りなく感じたのかもしれない。先述したように、締め切り直前に学生が慌てて駆け込むことがないよう、早めの来室を呼び掛けることが重

⁹ 「短かった」「少し短かった」「妥当だった、ちょうどよかった」「少し長かった」「長かった」の 5 段階評価。

要である。時間的に余裕をもって複数回来室することで、良い書き手としての自信を学生が身に着けられるようにしていくことが求められる。

対面セッションの良かった点と困った点

セッションの良かった点/困った点について、セッション形式別にたずね、表にまとめた。まず、表 14 に対面セッションの良かった点、表 15 に対面セッションで困った点の回答件数と割合を示した。

表 14 対面セッションの良かった点(複数回答可)

回答項目	後期の回答件数(%)	前期の回答件数(%)
場所がわかりやすかった	84 (14.9)	53 (15.0)
セッションブースなどの環境が整っていた	120 (21.2)	84 (23.7)
文章の共有が楽だった	135 (23.9)	84 (23.7)
チューターとの意思疎通がしやすかった	220 (38.9)	125 (35.3)
その他	3 (0.5)	4 (1.1)
回答なし	3 (0.5)	4 (1.1)
計	565 (100.0)	354 (100.0)

表 15 対面セッションで困った点(複数回答可)

回答項目	後期の回答件数(%)	前期の回答件数(%)
場所がわかりにくかった	21 (7.2)	37 (20.6)
セッションブースなどの環境整備に問題がある	2 (0.7)	1 (0.6)
文章共有の準備に手間取った	12 (4.1)	11 (6.1)
チューターとの意思疎通が難しかった	7 (2.4)	2 (1.1)

その他	53 (18.2)	20 (11.1)
回答なし	197 (67.5)	109 (60.6)
計	292 (100.0)	180 (100.0)

オンラインセッションの良かった点と困った点

次にオンラインセッションについて、表16にオンラインセッションの良かった点、表17にオンラインセッションで困った点の回答件数と割合を示した。

表 16 オンラインセッションの良かった点(複数回答可)

回答項目	後期の回答件数(%)	前期の回答件数(%)
移動の手間が省けた	52 (50.5)	44 (45.8)
文章やデータの事前共有が楽だった	34 (33.0)	32 (33.3)
対面とは異なり緊張せずに済んだ	16 (15.5)	14 (14.6)
特になし	1 (1.0)	4 (4.2)
その他	0 (0.0)	2 (2.1)
計	103 (100.0)	96 (100.0)

表 17 オンラインセッションで困った点(複数回答可)

回答項目	後期の回答件数(%)	前期の回答件数(%)
場所の確保が難しかった	4 (7.8)	2 (3.5)
文章やデータの事前共有が大変だった	6 (11.8)	1 (1.8)
どのように操作すればよいのかわからず不安だった	4 (7.8)	5 (8.8)

チューターの声が聞き取りづら いときがあった	1 (2.0)	6 (10.5)
特になし	35 (68.6)	42 (73.7)
その他	1 (2.0)	1 (1.8)
計	51 (100.0)	57 (100.0)

【所見】

対面セッションについて、良かった点は前期に引き続き「チューターとの意思疎通がしやすかった」が最も多く回答されていた。セッションを有益だと感じた理由においても、チューターとの会話を通じて問題点の気づきや内容の整理をすることができたといった回答が多かった。学生が文章に関する不安を打ち明けやすい雰囲気づくりができていることが考えられる。困った点として、前期よりも「場所がわかりにくかった」という回答の割合が減っていた。後期は卒業論文などの長い文章の検討で複数回来室する学生が多い他、ホームページにラボへのより詳細な経路を掲載したことが効果を発揮したのかもしれない。その他の回答はほとんどが「なし」「特になし」であった。一部、「学校が遠い」「Googleのバグが多い」といった、ラボで改善しようがない問題に関する記入も見られた。

オンラインセッションについて、良かった点の回答の割合は前期と大きく変わらず、「移動の手間が省けた」「文章やデータの事前共有が楽だった」が多かった。一方で困った点で「文章やデータの事前共有が大変だった」という回答の割合は前期より高くなっていった。その他の回答として、「インターネット環境が不安定だった」とあった。オンラインセッションは自宅からでも利用でき、セッション後すぐに検討した文章を修正することができる。しかし、回線が大学ほど安定しているとは限らないため、うまく文章の共有ができないといった問題が生じていたのではないかと。次年度から Webex が利用できなくなり Teams に切り替えられる予定である。オンラインセッション上でのトラブルは増えることが予測される。学生が安心してセッションを受けられるよう、Teams を用いたセッション方法についてマニュアルを早い段階で作成しチューター間で共有していきたい。

より良いライティング・ラボにするためのアドバイス

より良いライティング・ラボにするためのアドバイスを自由記述（任意）で回答を求めた。以下、自由記述部分に関する所見を述べる。

昨年（2024年）度の後期は、ラボへの要望で1月の最終週も開室することが挙げられていた。中央大学は100分授業で14回の授業で終わるが、レポートや論文の提出締切を授業終了後の1月最終週に設けている授業が多い。そこで、今年度は1月最終週まで通常開室したところ、ラボへの要望で開室日の増加のコメントは減った。ただ、後期は卒業論文など長い文章の相談が多いため、セッションの延長希望のコメントは複数見られた。また、曜日によって7セッション目に対面セッションが可能なチューターがいない場合もある。現在の人員数で、セッションの質を維持しながらこれらの要望に応えるのは不可能である。より多くの学生がラボを利用できるようにするためにも、セッション設置枠や設置数の検討が望まれる。

ラボへの要望として多かったのが、チューターの指名である。先述したように後期は継続的な利用が多いため、こうした要望が出やすかったと考えられる。ホームページでも指

名はできないが引継ぎはきちんと行われていることを示しているものの、学生としては見知ったチューターのほうが安心感を覚えやすいのだろう。なるべく多くの学生が利用できるようにする、新人チューターの育成のためにも指名制への移行は現実的ではない。引き継ぎにおいて次回の検討箇所を明記しておく等、継続的なセッションをスムーズに行えるようにしていきたい。

「バンクーバー式、SIST 式についても対応してほしい」「心理学・統計に強い方がいらっしやると嬉しい」など、アカデミック・ライティングの観点からやや外れたコメントもあった。ラボは専門内容について添削をする場ではなく、学生が自立した書き手として成長できるようアカデミック・ライティングの観点からサポートする場である。学生及び教員に、ラボを利用する意義についてより周知していきたい。これに関連して、「許可を得た上で、最近ライティング・ラボを利用した学生の添削箇所や、よくある質問を定期的に更新していけば、学生の継続的な学習を促せるかもしれません」というコメントがあった。このコメント通りに実践することは難しいが、どのような場面での利用が効果的か具体例を示せば、より多くの学生の適切なラボ利用につなげていけるだろう。

その他、「予約を Google フォームではなく、回答したらすぐに反映できるシステム形式にしてほしい」「資料の共有が、土日でもできるようにすること」「ワードの共同編集でおこなえるようにしてほしい」といった意見があったが、いずれも実現が難しいものである。就職活動用のエントリーシートや英語の文章など、ラボでは検討できない文章について誤って学生が予約してしまうことがある。土日の業務も当然行わない。Google ドキュメントを利用しているのは学生の個人情報保護のためであるため、Word への移行も難しい。また、「WiFi が不安定だった」というようにラボでは対応できない課題へのコメントも見られた。

対面・オンラインセッションともに多くの学生がセッションを有益だと感じており、ラボへのアドバイスとしても感謝の表明や現状に不満がないことを示しているのが多数であった。学生の生成系 AI の利用は年々増加しているが、後期は卒業論文や修士論文など長い文章を書くことが多い。例えば学生が生成系 AI を用いて卒業論文のアイデア出しや構成を組み立てたりしても、そこからどのように内容を広げていけばいいのか、テーマに沿った流れになっているのか、自分ひとりで考えていくのが難しいことがある。ラボのセッションを有益だと感じた理由として、チューターからの質問や会話を通して、自分の書いた文章を客観的に見つめ、気づきを得たり思考を整理したりできたことがよく挙げられていた。生成系 AI とラボを効果的に利用することで、長い文章であってもより完成度を高めることができ、学生の執筆への自信につながると言える。上述のラボへのアドバイスも踏まえてラボの環境を改善し、ラボを利用する意義を周知させ、より多くの学生が自立した書き手になるよう手助けしていきたい。

II セッション以外の活動

II-1 広報活動

II-1-1 出張ガイダンス及び見学ツアーの実施

今期は、出張ガイダンス1件、見学ツアー2件、合計3件実施した。前期と比較し実施件数が低いため、後期も教員に向けた宣伝を行ってきたい。なお、前期より実施しているミニ・ワンポイント講座の依頼に関しては、後期は0件であった。

II-1-2 チューターの学びに関する動画作成

2024年5月～6月にチューター10名を対象に実施した、チューター業務を通じた学びに関する半構造化インタビュー調査をまとめ、動画を作成した。

インタビュー調査は「ライティング・ラボにおける研修」「学習サポートから得た学び」「書くことに関する学び」の3つの観点で実施した。インタビュー結果をテキストデータ化し、ユーザーカル社の生成系AIテキストマイニング（無料版）を用いて分析を行った。さらに、NotebookLMを用い、インフォグラフィックと解説動画にしたものをHPに掲載した。

チューター業務から得られる学びをわかりやすく周知することで、チューター業務への興味関心を喚起し、チューター確保につなげたい。

II-1-3 他大見学者来訪

2025年11月5日に、本学ライティング・ラボの視察を目的とし、関西大学ライティング・ラボの教職員2名が来訪した。当日は、利用学生の数、セッション内容や実施方式、チューター研修などに加えて、生成系AIによる影響なども情報交換を行った。見学者から得た情報を今後のライティング・ラボの活動に活かしていきたい。

【所見】

11月から12月の繁忙期はほぼ満席の状況が続くため、積極的な広報活動を実施することが難しく、後期における出張ガイダンスおよび見学ツアーの利用件数は少ない状況である。一方で、比較的余裕のある時期の利用促進や、学部での早い段階からの利用を促すため、広報活動は継続して実施していく必要がある。

他大学との情報交換については、機会があれば積極的に行い、ライティング・ラボの活動の質向上につなげていきたい。

II-2 研修

II-2-1 学期中チューター全体研修

昼休み時間を利用し、合計5回の全体研修をオンラインにて実施した。各回のテーマは表18の通りである。

表18 2025年度後期チューター全体研修の概要

日時	担当曜日	研修テーマ
10/9(木)	木曜日	新人お悩み相談 —何のために質問するのか?—
10/23(木)	水曜日	文学系論文の特徴とチューターの不安共有
11/13(木)	火曜日	専門性の高いレポート・論文の セッションについて(心理学編)
11/20(木)	金曜日	専門性の高いレポート・論文の セッションについて(歴史学編)

1/15(木)	月曜日	専門性の高いレポート・論文のセッションについて（法学編）
---------	-----	------------------------------

今期は後述する夏期休業中の集合研修でとりあげた「専門性の高いレポート・論文の特徴」の応用編を実施した。専門性の高いレポート・論文を検討するセッションは、当該分野外のチューターにとってやりづらさを感じることが多いが、ライティング・ラボのセッションの観点が学術領域に横断して有効であることがチューター全体研修を通して確認できた。

文学系論文の回では、文学作品などを論じるレポート・論文の場合、その作品を全く知らない場合不安になるなど、チューターの悩みを共有した。心理学の回では、考察部が特徴的で不安になるチューターが多いが、「論点の整理」「主張と根拠」などの観点からセッションが可能であることを確認した。歴史学の回では、根拠として引用が必要かどうか判断しづらい、調べ学習になっていることが多い、という悩みを共有したあと、セッションでどのように解決していくか話し合いを行った。法学の回は、法学独特の表現がわかりづらいなどの不安を共有したのちに、「語句の明確さ」「論点の整理」などでセッションが可能であることが確認できた。

今学期全体を通じて、専門性の高いレポート・論文でもライティング・ラボのセッションの観点をういたセッションが有効であることがチューター間で確認できた。チューターが自信をもってセッションに取り組む土壌ができたという点でも、有意義な研修となった。

【所見】

今学期は、専門性の高いレポートや論文を扱うセッションに対して、チューターが抱える不安をテーマとした研修を実施した。どのような点に不安を感じているのかを共有し、当該分野に詳しいチューターから説明を受けることで、不安の軽減を図ったものである。

この取り組みにより、ライティング・ラボのセッションで用いる学術領域横断的な観点の有効性を確認できたことが、不安の解消に寄与した。結果として、チューターがより自信を持ってセッションに臨めるようになり、セッションの質向上につながる事が期待される。

今後も、セッションの質向上を目的として、継続的に研修を企画・実施していく。

II-2-2 長期休業期間中の対面集合研修

上記以外では、夏季休業期間中の9月16日（火）に、多摩キャンパス内ライティング・ラボで対面による集合研修¹⁰を実施した。今回の研修では、専門性の高いレポート・論文のセッションに自信をもって臨めるようになることを目標とした。

日時：9月16日（火） 13:30～16:30

概要：ラボに持ち込まれる法学・心理学・歴史学のレポート・論文でよくみられる問題とセッションでの留意点をそれぞれの分野のチューターから学ぶ。

今期の対面集合研修は、日頃のセッションでチューターが不安を覚えやすい3分野を対象に、チューターの不安を共有し、それぞれの分野のチューターからセッションの留意点

¹⁰ 今学期は新人チューターが1名であったため、午前中に予定していた新人チューター対象の集合研修は実施せず、学期開始後から新人チューター研修を開始した。

について説明を受けることで不安解消を目的とした。たとえば、歴史学では「調べ学習」となっている文章や資料の裏付けのない論証が散見されるが、どのような点で学術的文章として問題があるのかの説明を受けた。日頃の不安と解決策を共有することで、専門性の高いレポート・論文のセッションにも不安なく取り組めるようになり、セッションの質向上につなげたい。

Ⅱ-2-3 新人チューター研修

今期着任の新人チューター1名に対し、配属曜日のチューターを中心に、文章診断練習・セッション見学・セッション計画・模擬セッション実施など約2か月にわたり実施した。

着任直後の新人チューターに共通する課題として「セッションの目標を適切に立てられない」「効果的な質問ができない」「チューター主導となる」などがある。今後は、このように新人チューターに共通する課題を対象とした研修材料を整備し、できるだけ効率的に新人チューター研修を進められるようにしたい。

【所見】

後期の学期中に実施したオンライン研修および長期休業中の対面集合研修では、実際のセッションで生じた課題をテーマとして取り上げた。チューターが抱える悩みや不安を解消できるよう、ニーズを丁寧に把握し、それに基づいた研修内容の企画を行っていくことがセッションの質向上という点からも重要である。

Ⅱ-3 中央大学杉並高校チューター派遣業務

報告書を別添1に記載。

Ⅲ 来期に向けた所見

Ⅲ-1 チューター公募

後期のチューター公募を例年通り実施する。スケジュールは下記の通りである。

2月27日（金）	応募書類受付締め切り
3月10日（火）	面接（尹先生、中野 SV、松井 ASV、林 ASV）
4月1日（水）	着任

Ⅲ-2 高大連携の取り組み

従来通り、中央大学杉並高等学校へのチューター派遣を実施し、ワークショップおよびセッションを行っている。今期は、中央大学附属高等学校からもワークショップ実施の依頼を受けており、26年度での実施を検討している。

今後は、ライティング・ラボに比較的余裕のある時期を中心に、高大連携の取り組みを可能な限り拡大し、大学の施設やリソースを活用する意義を伝えていきたい。

Ⅲ-3 セッション以外の活動強化

セッション以外の活動として、チューター研修の充実およびワンポイント講座の多様化

を検討している。

前期に続き、後期も前年同期比で稼働率が減少しており、その結果生じている比較的余裕のある期間を有効に活用し、研修内容の充実につなげたい。研修テーマについては、今年度に引き続き、セッションにおける不安や悩みを解消し、チューターが自信をもってセッションに取り組めるようになるという観点から選定していく。

また、学内ワンポイント講座の内容や実施方法の多様化についても検討したい。これまでのワンポイント講座はアカデミック・ライティングに関する内容が中心であったが、セッションでは学生からワードやエクセルの基本操作について質問を受けることもある。このようなニーズを踏まえ、ワードやエクセルの操作方法を扱うワンポイント講座の実施について、チューターから提案が出ている。チューターがセッションを通じて把握した学生のニーズをワンポイント講座の内容に反映させる取り組みを、次年度以降検討していきたい。

以上

2026年3月3日

スーパーバイザー 中野玲子

アシスタント・スーパーバイザー 松井雄志

アソシエイト・スーパーバイザー 林雅子

【別添 1】

2025 年度後期 中央大学 ASC ライティング・ラボ
中央大学杉並高校セッション 実施報告書

2026 年 1 月 31 日(金)

担当チューター：田井 康平、西脇 祐、黒田 将司

1. セッション実施概要および稼働率

(1)開室期間・時間

今期の開室期間および時間は以下の通りとなった。

開室期間	10/02 ~ 11/07	
開室時間	①15:45-16:25	各 40 分
	②16:30-17:10	
	③17:15-17:55	

(2)実施方法

今期のセッションは以下の方法で実施した。

実施方法	生徒の要望に応じて、対面またはオンライン形式で実施 ○対面：図書室の特設ブースにて実施 ○オンライン：中杉ミーティングルームまたは自宅から通信
使用したアプリケーション	Google 社の Classroom や Meet、Document、Slide を活用
文章の共有方法	○教師：事前に課題を配信、生徒の割り振りを実施 ○生徒：検討希望の文章を提出 ○チューター：該当文章を共有し検討、セッション後に返却
曜日(担当者)	木曜日と金曜日に実施、担当者は以下の通り。 ○木曜日：西脇 ○金曜日：田井・黒田
その他	10/24(金)、11/07(金)の2回は、卒論の提出直前の時期のため、望を受けて2ライン設置とした。

(3)今期の稼働率

今期はセッションを 39 設置し、前年比 94.5%、5 セッション減少。稼働率は 92.3%であった。（小数点第二位以下切り捨て。）

月別	10月	11月	計	前年比
設置数	30	9	39	92.8%
実施数	30	6	36	87.8%
稼働率 (設置数÷実施数)	100%	66.6%	92.3%	94.5%

※上記グラフは、予約を元に集計。

・前年度後期の設置数は 42、実施数は 41 であった。そのうちオンラインの設置数は 9、実施数は 8 であった。

・前年度は 11 月の稼働率は 100%であったが、今年度は 66.6%であった。そのため、11 月の稼働率が低いのは時期の問題ではない可能性がある。なお、11 月の実施日の前後に、高校で何らかのイベントがあったかどうかは確認していない。

・今期のオンライン設置数は 15、実施数は 13 であった。

・今期の不実施数のうちオンラインが 2、対面が 1 であった。

2. ワークショップ

(1)概要

今期のセッション開始に先立ち、アカデミック・ライティングの技法の講義およびラボの宣伝を目的として、中杉ワークショップを以下の通り実施した。

実施日時	9/26(金) 15:50~16:50
テーマ	60分で分かる論文作成のコツー「パラグラフ・ライティング」のススメー
参加人数	9名
実施方法	<p>レクチャーおよびワークの2部構成で実施。</p> <p>①レクチャー パラグラフ・ライティングの技法について講義。</p> <p>②ワーク 課題文を用意し、パラグラフ・ライティングの観点から中心文および支持文の整理という作業を実施。</p>

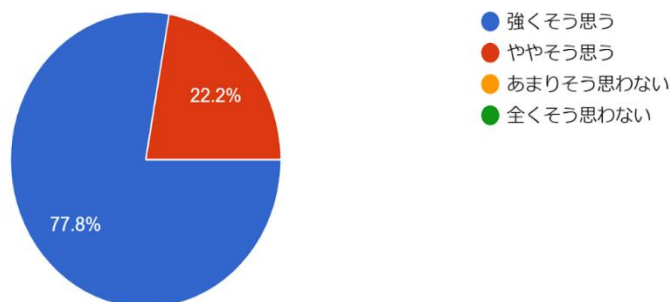
・なお、前年度の参加人数は 14 人、前期の参加人数は 32 人であった。

(2)満足度に関するアンケート結果

今期のワークショップの満足度に関するアンケート結果は、以下の通りとなった。

本日の講座は、有益だったと思いますか。

9件の回答

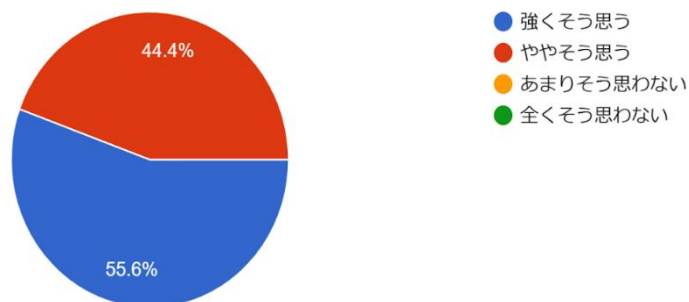


- ・夏休み中に論文を書いた生徒2名から、文章の訂正の仕方がわかってよかったと肯定的なコメントがあった。
- ・改善点や、批判はなかった。

また、本ワークショップとの関連でラボの利用に関する意識調査を行った結果、以下の通りとなった。

今後、ライティング・ラボを利用したいと思いますか。

9件の回答



- ・「ややそう思う」については、「時間さえあれば」というコメントがあった。

3. 今期の所感

○今年度の生徒について

- ・とても熱心に取り組んでいる印象を受けた。
- ・「問い」を忘れて文章を書いているケースがいくつかあった。問いを確認し、大筋を確認し、それに対して章や節がどのような役割をしているのかを検討することが多かった。
- ・探究マップの問いの調整をあまりしていない印象を受けた。文章を書いて「自分が何を書いているのか」が明確になったら探究マップを書き直すように促してもいいと思った。探究

マップの問いが曖昧なままのために、論文内で議論が進展してても、そのことが論文全体に活かされていない場合があった。

- ・前期と比べて、オンラインでの機材トラブル（マイクが入らないなど）はほとんどなかった。

- ・オンラインでの実施では、自宅からの出席も複数あった。

○オンラインセッション中の双方向編集の難易度について

オンラインセッション中は生徒が学校のPCを用いることが圧倒的に多いため、双方向編集が難しい場合が存在する。どのような機材を用いて学生がドキュメントに入力を行っているかコンピューターから判別できないため、問題が生じているのかの把握も難しい。

以 上